Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-06-09

《新刊紹介》田中あずさ 著『サブジェクト・ライブラリアン：海の向こうアメリカの学術図書館の仕事』

佐藤, 知生

(Citation)
図書館界,70(3):501-501

(Issue Date)
2018-09

(Resource Type)
article

(Version)
Version of Record

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/90005443

新刊紹介

佐藤　知生

田中あずさ 著

サブジェクト・ライブラリアン：海の向こうアメリカの学術図書館の仕事

笠間書院　2017.12
220p　21cm　定価2,400円(税別)
ISBN：978-4-30570-860-1

「図書館職員に“専門性”はあるのか。」この仕事をはじめてから時々こういった疑問を耳にする。この問いが俎上の載ることが一つの答えではないかと感じる一方で，幾度となく議論の的になるのはニーズの表れといえなくもない。“専門性”といっても様々なものがあるが，このほど日本の図書館(特に学術図書館）にとって興味深い“専門性”に関する本が刊行された。

『サブジェクト・ライブラリアン：海の向こうアメリカの学術図書館の仕事』（以下，本書）は，ワシントン大学東アジア図書館にて日本研究専門のサブジェクト・ライブラリアン(以下，SL）として働く田中あずさ氏によるSLに関して体系的に紹介された書籍である。これまでも論文などでは米国のSLに関する単発的な報告はあったが，このように1冊の書籍として出版されるのは本邦で初めてだ。構成としては，SLの定義や成り立ちから始まり(第1章『サブジェクト・ライブラリアンって何？』)，米国でSLになるための道のり(第2章『サブジェクト・ライブラリアンになるには』)，SLの日常業務(第3章『日々どんな仕事をしているのか』)，研修事情(第4章『こんな研修でスキルを磨く』)，昇給や評価の仕組み(第5章『キャリアステップを知る』)，近年の変化(第6章『変わりゆくライブラリアンの仕事と環境』)，そして著者の同僚からの生の声を取り上げて締めくくっている(第7章『サブジェクト・ライブラリアンたちへのインタビュー』)。

豊富な情報量の割に専門的な表現はあまりみられず，驚くほどSLの全体像が理解しやすく綴られている。加えて丁寧にまとめられた参考文献が添えられており，より詳細な情報を求める人へのケアもなされている。ライブラリアンとしての情報を伝える著者の手腕が窺えるが，それ以上に特筆すべきは，現役のSLとして活躍されている著者の体験が随所に挟みこまれている点だろう。単なる制度の話にとどまらず，SLを取り巻く環境を内側から記した資料は稀有である。これから米国でSLを目指す方のバイブルとなることは間違いないが，米国の研究環境を知ることができるという点では留学を考える学生や研究者にとっても有益な情報が多い。

同業者である大学の図書館員には，第6章にある近年の変化について注目してもらいたい。そこでは，SLを取り巻く近年の変化が取り上げられているが，その一節に1人のSLが複数の学問領域・大学を担当する傾向がみられるようになってきたと書かれている。この傾向には人材確保の問題などが背景にあるようだが，他の部分の記述も踏まえて考えると分野間の風通しをよくする狙いもあるのかもしれない。いずれにしても，変わりゆく環境の変化や需要に応じて“専門性”の在り方も変化しているようだ。もし仕事の“領域”と“専門性”に負の相関があると仮定すると，担当領域を広げることで“専門性”はある程度緩められることになる。こういった傾向を見ていくと，図書館員の立場というのもスペシャリストかジェネラリストという二者択一ではないと考えさせられる。おそらくその二つの間には，無限の選択肢がグラデーションをもって存在しているはずだ。もちろんキャリア制度との親和性もあるだろうが，本書で紹介されている一見手が回らなそうな仕事も決して遠い世界の話にしてはいけないのだろう。

本書の「おわりに」で著者はこう疑問を投げかける。「サブジェクト・ライブラリアンの仕組みが，学術図書館における利用者サポートの最善の形かどうか，…」(p.220)。ともすれば教科書のように祀り上げがちになってしまうが，米国のSL制度もまだ発展途上とのことである。それでも，教員に寄り添って研究や授業をリサーチし，主題のトレンドをおさえ，学会などの学術コミュニティとコネクションを築き，ひいては予算調達まで奔走するSLたちの働きが米国の大学を支える一助となっていることは確かだろう。私たち日本のライブラリアンがそこから学ぶことは依然として多い。本書をきっかけに，日本の学術図書館においても主題支援の在り方について議論が活発化することを望みたい。

（さとう　ともき　神戸大学自然科学系図書館）